

蒙古時代から元代にかけて金虎符・金符・銀符・海青符・圓符等五種の符牌の行はれたことは余が曾て蒙古驛傳考中に述べ、ついで箭内博士が元朝牌符考に於て詳説した所である。これ等の諸牌中、今日に存してその形状の知り得らるゝものを求めると、

一はユールの譯註したマルコ・ポロ旅行記 (Yule, The Book of Ser Marco Polo) 第三版、卷一、三五二頁と三五三頁との間に挿入してある圖版によりて示されて居るもので、一八四六年エニセイ州のミヌシンスク地方から發見せられたものである(口繪第一圖)。この牌の地質は銀で、上下を弧形とした長牌の両面に、鍍金の八思巴字、即ち元の國書を刻み、牌面の上部に鐵製の輪を箝入し、輪の縁邊上部に口字^③四十二號と記してある。牌面には何等裝飾的模様を有しない、思ふにこれは元史にいふ銀牌、蒙韃備錄に素金牌と並稱してゐる銀牌、徐霆の黑韃事略疏證に平銀牌と稱するものに外ならぬであらう。前記マルコ・ポロの旅行記には金地でこの牌を圖示してゐるけれども、その實物の銀牌であることは、特に註記されてゐることである。

二は羅振玉氏が歷代符牌圖錄に元國書牌と題して收めた上圓下方の長牌であつて、中央に八思巴字一行、上部に虎頭、左右下の三邊に雷紋を刻み出し、虎頭と文字との間に當りて紐孔を穿つてある(口繪第二圖)。この牌の地質が何であるかは著者の註記がないから知るを得ないけれども、若し金牌ならば元史にいふ金虎符、徐霆の黑韃事略疏證及び長春真人の西遊記にいふ虎頭金牌に相當するものであらうし、金牌でなければ虎符(牌)にも金を以て作つたもの以外、別にかゝる金屬で作られたるものもあつたことを認めなければならぬ。これについては更に下に述べようと思ふ。